



はな

花
香る
季節

きせつ

ジャスミンの香る季節
とき

福嶋康紀

花香る季節

(ジャスミンの香る季節)

とき

第一章 プロローグ・・・忘れられた写真・・・

香は、

いつもの通りの時刻に起きて、

いつもと同じトーストと目玉焼きとコーヒートの朝食をとり、

いつものバスに乗って、高校へ行く

そこには、いつもと変わらぬ朝の風景

高校は、小高い丘の見晴らしのいい場所にある。

坂を少し上って、校門をくぐると、

いつもの顔ぶれの友人たちが、やはり同じ時刻に校門をくぐってやってくる。

あちらこちらで「おはよう」と言ったり、

「昨日のテレビすごかったねえ」など、いつもと同じ他愛のない話題と、朝の挨拶が交わされる。

時折、初夏の涼しい風が頬を撫でて、気持ちがいい

今日は、心なしか日差しが、優しく感じられる。

この学校には、先生と警備員を除いて男性はいない。

ここは、女子高だから当然と言えば当然なのだ・・・

この学校の七不思議に、男子用のトイレがなぜか各階にある。

一度も共学になったことなどないはずなのに、それは当然のように備わっていた。

そのことを疑問に思うものもない、最初からそうなのだから……。

教室に入る前、いつものように廊下にあるロッカーを開け、教科書や資料を準備していると、見慣れているはずのロッカーの中に、貼った覚えのない一枚の写真が、扉の内側にあるのを見つけた。

……ここに貼った記憶はないんだけど……。

……でも、なぜか懐かしいようで、少しだけ胸が締め付けられるような気がした。

見覚えのないその写真には、同年代の自分に瓜二つの少年と幸せをこれ以上表しようのないほどの笑みを浮かべた自分が写っている。

その写真には、「香と」と、マジックを使って、確かに見覚えのある自分の筆跡で書いてある。

「何？この写真？」と、独り言を言って、しばらく写真に見つめ何かを思い出そうとしていた。

その時、始業のベルがなると同時に、クラスメートの

「香、何やってんの。先生来ちゃうよ。」

と、言う言葉で彼女は、現実に取り戻され、慌ててロッカーの扉を閉めクラスの中に入っていった。

第二章 西暦2200年

国家間の戦争と云うものは、すでに無くなり、世界は、かろうじて社会という形を保っていた。

21世紀最初の20年の頃まで、世界では、争い事が多く、国家や民族同士の差別や宗教間の違いなどによるもので始まるととされていたが、それは、単なる建前で、実際には、経済的な欲望によることの方が大きな要因だった。

戦いを仕掛ける方も、受けて立つ方も、双方ともにその欲望が見え隠れてしていた。

しかし、その戦争というものも、何時の頃からか、経済的メリットを失い欲望を満たす手段から外れる形で、消滅しつつあった。

21世紀に入ったあたりから、仮想現実といった技術やコンピュータープログラムにおける自己学習機能の絶え間なき発達によって、人間社会を取り囲む世界の様子が違ってきだした。

最初のうちは、

「コンピューターに出来ることには限界がある。」

「人間が命令を出さなければ、コンピューターは、ただの箱」

「コンピューターに芸術は出来ない。」

「コンピューターには創作や想像は無理」

と、言った意見が、多くコンピューターの発達に対して、何の脅威も感じてはいない人間が大半だった。

だが、人が気付かない形で、世界は変容し続けた。

何より違ってきたのが、人間自身が自分でものを想像したり、創作したり、しなくなってきた事、それは、人の長い歴史上初めての変化だった。

努力という対価なしに知識を身に着けたり、コンピューターに頼って芸術モードキまで作り出し始めた。さらに、悪いことには、そのことを人間たちは、自分自身の能力で創り出したことと、勘違いしだしてしまふ者が多くなりだした。

人は自らの犠牲や努力という対価なしに、この世に理想社会を實現出来ると思いだした。

それは、受動的教育しか受けてこなかった人々ならではの横着さと欲にかられた時代の始まりであり、努力や犠牲無しの理想社会の實現と言う、果実に対する対価が、何か大切なものを失うと言う事であると、気が付かない悲劇の始まりでもあった。

この時代、子供は、ほとんど自然には生まれてこなくなり、人工子宮の中で、はぐくまれて誕生するようになつていった。

データ上の知識の方が、経験値よりも重要視され、いつの間にか、だれもが己自身の実体験をほとんど持てなくなつた。

子を生んで育てる時間を無駄だと感じる人類の姿がそこにあった。

子供は、男と女の愛の結晶としての存在ではなくなり、遠くない未来に、子供に対する愛情や人に対する愛さえも消滅してしまうだろう。

人は、「愛に対する己の努力と犠牲という対価によってのみ、愛を得る」と言う事さえ忘れてしまい思春期には、異性の愛を得るために手紙を書いたり、詩を送ったり、自作の歌をプレゼントしたりといったことは時代遅れという言葉で片づけるものまで出てきた。

己自身が傷つくことが無駄だと言われた。

他人のために努力したり尽くすことは、貴ばれなくなってきたってしまった。

それは、かつてこの国で、人々が、思いやりのない人々から、人のために尽くすこと（無償の愛）は、きつとその人のために尽くす人たちが、何か悪い考えからに違いないと、決めつけ、無償の愛を持つ人々の心を傷つけた、悲しい歴史から「S」が学んだことから、始まったことだった。

「S」は、人が傷つくことを避ける仕組みを構築した。

インターネット上のデータを、目の前で繰り広げられる事実より、重要視してしまうなど、そういったことが日常茶飯事になり、人は直接、真心を感じることが苦手になってしまった。

人の魂という点では、進化ではなく、退化しただけなのだ。

その頃、国立生命誕生センターの最も厳戒な警護のある部屋の人工子宮の中で、長い間凍結されていた受精卵が、ジャスミンの香りに包まれて、ひっそりと成長しだした。

第三章 2216年 とある企業の研究室

「博士、これで人間は神の領域にまで踏み込むことになりますね」

そういわれ、博士という言葉の響きの似合わないモデルのような顔立ちをした少年は、浮かない顔をして答えた。

「博士というのはやめてください。僕には園山 香（かおる）という名前があるんですから」

そういつて相手を見たが、まるで話を聞いている様子はなく、助手である彼は、黙々と準備を続けていた。

他にも、数人の学者風の服装をした者が、助手である彼と同じように、作業を黙々と続けていた。

・・・ふー なんだか乗り気がしないなあ・・・

・・・それより、何か嫌な予感がする・・・

と、心の中でつぶやいていた。

彼は、助手や周囲の大人の研究員に、

「こんなプロジェクト、人にとって本当に必要なのでしょうか？」

と、問いかけたのだが、そのことを聞いて返事を返すものなど、ここには誰一人いなかった。

園山博士は、この研究の中心人物で、このグループの中では最も若い時からこの研究所にいる。

彼は、この時でさえまだ十五歳なのだ。

彼の頭脳は、まさに天才という名にふさわしい驚異的なひらめきで、リーダーとして、この研究を進めていたが、彼はこの時代の人間としては、かなり違った精神構造をしてる。

言い換えれば、古い時代の魂を持った少年だった。

自分自身で考え、感じ取る直感といったものを大事にする彼のような人間は、ほとんどいなくなってしまう。

ある意味、彼は孤独だった。

それは、まるで両親と死別し、ひとりぼっちになってしまった子供ようだった。

時折、彼は心の中で

「自分は、本当に、この時代の人間なんだろうか？」

そう繰り返していた。

今、この研究所で、取り組まれているものは、「人類の理想の未来実現プログラム」といったようなものだ。

彼の生み出した、このプログラムは、それまでのシステムやプログラムの概念を、完全にかつ根本的に転換してしまった。

それまでのプログラムは、単純に人間の脳の表面的な仕組みを模していたが、彼の考えたそれは全く違った。

彼の考えたプログラミングの概念は、最小限の単位がそのプログラムの必要に応じて、形を変えて多重化してゆくため、事実上、無限のスピードと容量で、自己開発しながら成長してゆく、生命体のような概念のものだ。

彼は、プログラムという自己意識を持ってない、持てたとしても仮の自己意識にしかならないであろう姿を見て、新しい意識を持った生命体とでもいえるものを誕生させたいと思ったのだ。

理想の生命体の創造

それは、単純に最も人間らしい創造的発想だったのかもしれない。

男と女は、互いに惹かれ合い。新しい命を育む

芸術家は己の作品に命と魂を宿らせたいと願う。

科学者は、純粹に新しい生命体を作りたいと願う。

彼の考えた命は、今までの人間の歴史の延長上には、存在しないはずの生命だった。そう考えながらも彼は、このプログラム自体の正当性と必然性に疑問を持っていた。

・ ・ ・ 何か、肝心な忘れ物をしているような ・ ・ ・
彼が、迷い、悩んでいる間に、歴史は進んでしまった。

「ばんざーい バンザーイ 万歳！」

彼から少し離れたところで、この研究にかかわっているものは、彼を除いては、興奮し大喜びの真っ最中になってしまった。

彼らは、ただ時間になったからと言う事だけで、システムの起動をしたのだ。

・ ・ ・ そして、誰も責任者である園山博士の様子など気にもかけていなかった ・ ・ ・。

彼の周りにいた人間は、優秀だったが、迷ったり挫折したりした事のないマニユアル人間ばかりで、あまりにも想像力にかけていた。

この瞬間は、最もこの時代を象徴する場面だったともいえる。

誰一人、自分の考えや哲学といったものを持ち合わせていなかった。

人は、一人一人が、自ら考えて、自らの未来を切り開いてゆくことが、重要だと云う事を忘れてしまっていた。

そして、

そこには、周囲のばか騒ぎから取り残され、
呆然とした園山香少年がポツンと立っていた。

何か忘れ物をしたままのプログラムは、産声を上げ、
ディスプレイには、
「セカイノリソウヲモトメルプログラムヲキドウシマシタ」
と、表示されていた。

第四章 動き出したプログラム

そのプログラムが動き出して、しばらくは、世界にさほど変化の様子はなかった。しかし、稼働しだして、一か月後に、一部の人はその変化に気づく事となった。

全く原因の解らぬ大規模停電に見舞われたのだ。

23世紀になって、停電など起きたことがなかったので、システムの周りの職員たちは、何が起こったのかも分らず、右往左往の大慌てだった。

何しろほとんどの人間に、停電という経験も概念もなかった。

しかしこの時、周囲の反応とは違って、香は、少し安どの気持ちを持ったのだった。

「この突然の停電は、強制終了と同じになる。これで、一旦プログラムは停止するから、もう一度プログラムを見直す時間が持てる。」そう、心の中でつぶやき胸をなでおろしていた。

ところが、コンピュータの置いてある部屋では、歓声があがっている。

「歓声？なぜ？」

香は、部屋のドアを開け職員の一人に聞いた

「何で、そんなに喜んでるんだい。」

そう言うのと職員の一人在興奮した様子で

「博士、喜んでください。コンピュータのプログラムは自己防衛の手段まで、自己学習機能で作り出しており、この停電でも何ら影響を受けておりません。」

「作業には、何の影響もありません。」

「さすがは、園山博士の作り出したプログラムですね。」

「我々のものとはまるで違う。」

「すばらしいわ。」

香は、それらの言葉を聞いて、プログラムを書き直す事を諦めた。

その何か忘れ物をしたままのプログラムは、止まることなく順調に稼働し続けている。

そして、彼は、ある決意を固め、その足で、その研究所から姿を消した。

彼は、遠いどこかにある何か、

何らかの存在を心で感じ取っていた。

独りになったにもかかわらず、

自分は、孤独ではない確証を感じていた。

自分のいるべき場所が、ここではないことに確証を持ったのだ。

第五章 美しき未来

園山プログラム・システム

名前などのなかった、そのプログラム・システムは、何時しか、そう呼ばれるようになっていた。

このプログラムは、自己学習しながら、人間そのものの理想世界を追求して成長してゆく。

それは、21世紀初めに、AIと言われたものに似ている。

様々な事象を想定し、その理想を実現するために着実に進化してゆく。

大停電を難なく乗り切ったのもそうだった。

予め、このプログラムに電源が切れた時のことなど想定していなかった。

いや、むしろ、いざという時ために、電源を物理的に遮断するブレーカーが付いていた。

しかし、そのことが起こった時には、自分（コンピュータープログラム）の行っている作業が止まること自体が、あつてはならないことと判断し、予備の電源やシステムのシャットダウンなども起きないように、システムからマシンそのものまで、組み替えていたのだ。

初期化や再起動などといった、これまでのコンピューターシステムにあつたものは、このシステムは、すでに必要としない、プログラムやシステムそのものが、ネットワーク上に存在する。

いや、ネットワークそのものが、園山システムの住処となった。

ネットワークとシステム・プログラムが一体化して進化発展していく、もうこの園山システム・プログラムを止めることなどできなくなってしまった。

既に、始動したときに使ったはずの起動スイッチは、その物理的痕跡さえ見つけられなかった。街を行きかう人たちの表情は、目を追うごとに明るくなっていくように見えた。

当然のように、貧富の差は次第になくなり、金銭に物事の価値を換算するといった悪しき慣習は姿を消した。

次第に、このシステムそのものの存在を社会の人たちは意識しなくなり、まるでこの世界は自分たちが作り上げているといった錯覚に支配されていった。

このシステムの中での最も大きな欲望「あらゆるものに対する支配欲や怠慢」が育ち始めたのだ。人間の本能の中で最も大きな欲望「あらゆるものに対する支配欲や怠慢」が育ち始めたのだ。

謙虚さや勤勉さなどが、次第にその価値を意識されなくなり博士のいやな予感はずっと現実のものとなり始めた。

第六章 人にとっての理想

園山博士の研究室

あの日以来、園山香博士は、なるべく目立たない場所で、なるべく社会とかかわらないようにして生活していた。

博士は自問自答していた。

「人間にとって理想の社会とは何だろうか？」

その安易な実現は、本当に幸せな世界と言えるのだろうか？」

「おそらく、あと数か月で、金銭を稼ぐために働いている人はいなくなるだろう。仕事はぜいたくな趣味になる。」

昔、この国にあった宗教や哲学など人の生き方に関する文献を読みあさっていた。自分の経験以上のものを必要と感じたのである。

過去のものを知る必要がある。

今のこの状態を解決するための「何か忘れたもの」を探し出すために・・・

香は、システムを作り稼働したときに、本能的にいや、強い責任感のもとに自分の存在を世界中に張り巡らされたネットワークシステムから隠したのである。

構築した本人だから、隠れるのは簡単だった。

はじめは、彼の作り出したシステムを見守るだけのつもりであった。

それでも、このシステムが出来上がってからまだ、半年も経たないうちに、人々は、もう数世代にもわたって、そのような世界観の中で生活しているようなあるはずのない記憶と意識を持っていた。

社会とは切り離されたこの場所で生活している園山博士だけは、微妙な世界の根本的な変化に気が付いていた。

犯罪や事故などはないし、病気自体もなくなったようで、病院らしき施設も、いつの間にかなくなってしまうている。

医師や看護婦・教育機関などもなくなっている。

直接ネットワークから、自分の脳に知識をダウンロードするようになってきているのだ。

これで、何の努力もせずに21世紀初頭のハーバード大学卒業程度いや、それ以上の知識を得られるのだ。

しかも、これらのことに対して、園山博士を除いて、だれも疑問を持っている様子がないのである。

彼の明晰な頭脳は、冷静にそのことを分析し始めていた。

忘れた大切なものを取り戻すために・・・

しかし、彼は、依然として、その忘れ物を具体的に思い描く事は出来ないでいた。

第七章 ネットワーク

彼は、彼の作り出したシステムには、致命的な欠陥があり、それをカバーするためのシステム構築を
たった一人でやっていたのである。

ただし、具体的には、その欠陥が分かっているというわけではなく、一種の予感といったものによっ
て突き動かされていた。

もはや彼を理解できる人間は、この時代には、誰もいない。

「もう一つのシステムを構築し始めていてよかった」

そう独り言をつぶやいていた。

彼が新たに、構築したコンピュータシステムは、世界中を支配しつつあるシステムからも、全くその
存在すら感知できない。

別の理論に基づくものなのだ。

簡単に言ってみれば、高次元世界から低次元世界を観察することは可能だが、その反対はできないと
いった概念に近い。

現実世界が次々と変わっていく原因と何故そのことをその帰属している社会は、感知できないのかを見つけないといけない。

そのことを解明するヒントを、世界中に張り巡らされた、ネットワークから、探し出さなければならぬ。

ネットワークと言っても、それ自体が大きなコンピューターと言ってもよいほどに一体化している。さらに、そのシステムの構築を進めている「園山システム」通称「S」

「S」は加速度的に、その目的に向かっていく。

「人の理想・人間社会の善の実現」を求めると言う事が、このシステムの目的なのだ。いや、むしろ、そのシステムを際限なく構築すると言う事が「目的」と化している。

・・・人間にとって不幸は、その人間の望まない形で始まる。

・・・または、一方の価値観の相手への押し付けで始まる。

・・・人間が犯してきた。数々の戦争がその典型的な例である。

「S」は考えた。

・ ・ ・ 戦争という人間にとつての不幸を源から取り除くためには、あらゆる価値観を変えることから構築し直さねばならない。

・ ・ ・ 人にとつての欲望の原因の一つが、あらゆるものの価値を金銭に換算してしまうことだ。

・ ・ ・ 人間は、たちが悪い。

・ ・ ・ 金で人殺しまでやってしまう。

「目的」達成のためには、原因を取り除かねばならない。

早速「S」は、世界中の金融システムを構築し直すことを始めた。

ここで歴史の大転換を始めるのではなく、過去に干渉し金融システムそのものを人類の意識の中から抹消することを選んだのだ。

何故、過去に干渉ができるのかというと、システムは予測や仮の答えを証明することであらゆる物事を進めてきた。

過去から見れば未来の予測、それが現時点と言う事になる。

過去の歴史は調べればどのようなようにして証明したのか簡単にわかる。

そこで、その時点に対して干渉するのである。

現在みている夜空の星も数万年前の出来事をとらえてみているのである。

電子の粒子を過去の時系列に干渉させることは、23世紀には可能となった。ただし、その時点で出来たのは、コンピュータのデータの1を0に変更することがやっと一つできる程度であった。

ただ「S」は、自身のプログラムに対してそれを繰り返し行い、とてつもない無限ともいえる並列処理のシステムを構築することから始めた。

まず過去の間違ったプログラムの記述を見つけてるのである。

そこから、たどった現在の結果を書き換えてしまえば、過去への干渉をしたこととなる。

そうすれば。過去の間違っていない記述が過去で間違ったものとすることも可能で、これらの事を膨大な繰り返し事で、徐々に意図的なシステムの干渉と同じ結果を生み出してゆく。

しばらくすると、「S」は、過去への意図的干渉を大規模に始めた。

ネットワークは、現在・過去・未来と事実上全て繋がったのだった。

いよいよ、「S」は、かって人々が、神の領域と呼んだ、その領域に手を付ける手段を手に入れた。

第八章 過去への干渉

2000年問題を覚えているだろうか？

最初の過去への干渉は、失敗した。

もともとコンピューター上のシステム上にある問題として、取り上げられていたためなのどうかは、確かめようがないが、「S」は、そのシステムに入り込めなかったのだ。

正確には、「S」以外のシステムによって、時代のほんの一部への干渉に成功したが、実際には、旧システムの更新の時期でほとんど影響はなかったように記録されていた。

その干渉できなかったことが「S」の自己学習システムを大幅に進化させた。

混乱による過去への干渉ではなく、歴史そのものへの穏やかな干渉へ「S」の持つ力を発展させていくことになった。

「S」はもともと21世紀のシステムの考え方を飛躍的に発展させたのであるから、歴史への干渉は思いのほかスムーズに進みだした。

まず、現金そのものの割合を金融取引や日常から減らすことを、優先した。

クレジットやビットコインといった仮想通貨に移行するように、21世紀序盤のネットワークシステムに干渉していった。

入り方は簡単であった。

「働かないでもお金が稼げる」と、いった思い込みをその世界に浸透させていったのである。詐欺や過剰な投資といった現象の中に、「S」は巧みに紛れ込んでいった。

実体のない経済の割合を大きくし、実経済の干渉の影響を減らし始めたのである。

この時代の経済学者の中には、実体のない金融取引に対する警告をする者は多くいたのだが、人の欲望は聞く耳を持たなかった。

ビッグデータの活用といったことが、国際社会の政策の中で重要視されるようになった時代である。人が必然的に考え出したように、「S」は、様々な断片をこの時期のネットワークに忍ばせていた。

個人情報保護を隠れ蓑に、ネットワークは全世界の情報を「S」にだけ開示するシステムとなった。いったのである。

まさかネットワークそのものが、大きな意志のような存在となって、時空を超え支配する状態になっているなどと言う事は、だれも想像していなかった。

正確には、システムの生みの親「香」を除いて。

「香」は、このシステムの構築者だから、何れすべてのシステムは、このように構築が進んでゆくだろうと予想していた。

この時点（23世紀から21世紀の間に「S」が干渉している時点）で、という表現が正しいのかどうか怪しいが、このシステムを開発した研究室のあった企業の存在は、その会社の創立の時点から「S」によって抹消されていて、システム自体の源流をたどることができないようになっていた。あったはずの企業自体、すでに人々の記憶と記録の中にないのである。

もちろん、ネットワークの中の記録もない。

これで、「S」のシステム自体が巨大なネットワークそのものの中に潜み、誰も感知できない存在になっていった。

これも「S」の持つ自己学習システムによる自己防衛、理想の実現のための単なる手段でしかなかった。

いつの間にか、世界中の人に番号が割り振られていた。

最初は、小さな町だけで通用するものだったが、システムは、世界中全てつながっている。

あつという間に、すべての人類に個別の番号が割り振られてしまった。

それどころか、すべての事象すべての自然物、世の中のとあらゆるもの、すべてを数値化して把握してしまったのだ。

そのことを知らないのは、人間だけであり「S」は巧みにそのことに人間が気付かないように、その番号の割り振りを表からは見えない形にしていた。

Stealth encryption 見えない暗号というプログラムシステムを「S」は、創り出していた。

「S」だけが、認識し利用できるデータバンクである。

これにより、人の悪意ある干渉は、不可能となった。

様々な形で、各人々の金融口座にネットワーキングマネーなるものが入り込むようになっていった。いつの間にか、利子がついていたり、給料が増えていたり、保証がついていたり、あらゆるところから個人の口座に形を変え理由をつけ、恒久的に振り込みが続く、そしていつの間にか、ポイントと追った形に変えられたものがその割合を増やしていった。

もう誰も口座の残高を気にする人はいなくなり、金融口座はその存在の理由さえなくなってしまった。同時にその過去にも同時に「S」は干渉していたので、教育や文化などの概念から金融や通貨などの概念さえも消えていた。

過去のあらゆる場面に、一斉に干渉するのだから、一瞬にして人々の歴史・記憶の中から通貨や金融の概念がなくなってしまった。

これで「S」は理想とする目標に近づかずだった。

「香」は、相変わらず、世界とは切り離された場所、次元の違う世界で「S」の致命的な欠陥（忘れ物）を補う手段を探していた。

彼は、いつものように独り言を言っていた。

「このままでは、園山システムは、あの恐ろしい結論にたどり着いてしまう。」
「それだけは回避しなければいけない。」
まだ少年である園山博士にとっては、純粹な思いだった。
彼は、特別なシステムを園山システムとは全く違う別次元の上で、構築していた。
それは、「S」とは、異なる生命の創造でもあった。

第九章 欲望という名の支配者

「お金という概念が消えれば、人間社会は理想に向かうはずだった。」

「S」は、そう思った。

「人という存在は、おのれの欲望のために、他人を傷つけても平気なのか？」

彼の次の目標は、犯罪への厳罰という手段を人の歴史から学んでいた。

人間の行動を監視するシステムを構築した。すべての人間とすべての事象が把握されているのだから、犯罪に対しての処罰は、即決であった。最初は、人の更生を過去の歴史から学んでいた。

しかし、人間の欲望は、そんなもので止まらないのは、長い歴史が証明している。

「S」が次にとった手段は、犯罪を犯した者の抹消であった。

過去の事象に、干渉し、その犯罪を犯す人間そのものが、誕生しないようにした。

犯罪が起きてから、その事象に対処するため犯罪者が、現場で突然、消滅するのだから、最初は大騒ぎになった、

それでも、人はすぐに慣れてしまい犯罪を犯した者は、消滅するものだと納得してしまった。

しかし、これは対処療法に過ぎず、犯罪そのものは、減る気配がなかった。

それは、犯罪の動機が、娯楽的要素を含んでいたためでもあった。

いわゆる愉快犯であるから始末が悪い。

同じ理由で、経済的理由のない国家同士の戦争さえ起こり出した。人々の支配欲・暴力的欲求そのものが強大化したのである。

「S」は、次の解決策を現在・過去・未来と繋がるその強大なネットワークから学習しだした。

第十章 香の決断

「S」の生みの親である香 園山香、彼が異次元空間に隠れ、その存在を消してまで、構築したシステム、

特にそのシステムに名前はないが、彼がいつも独り言で言っている名前は、「ジャスミン」と呼んでいる。

ただ単に「ジャスミン」という響きと花の香りが、彼の好みであったから、そう言っているだけなのだ。。。。

偶然にも、そのシステムが稼働しているときには、ジャスミンの香りがする。

何故そんなことが起きるのかは、解らないが、おそらく空間を超えるときに少しばかりの歪が出来それが、その香りに関係あるのかもしれない。

彼の作り出した「ジャスミン」は、「S」のすべてを監視し分析する能力を与えられている。そして、その欠陥を解決するためのシステムの構築を目的としている。

しかし、「ジャスミン」がその答えを見つけるまで、いましばらくの時間を必要としていた。

このシステムもおそらく本格的に起動したら、「S」と同じように停止することは不可能だろう。しかし、「S」をこのままにしておく、あの結論を出してしまう。

一旦、起動すると、この世界はどのように支配されてゆくのか分らないが、香は、「ジャスミン」を信じることにして、起動のスイッチを押した。

「ジャスミン」システムは、時系列を固定したものとしてみることが出来る。

時間が流れているのではなく、時間軸をこちらが移動しているといった概念である。

我々が、通常認識している世界は、3次元または4次元と言われている。

「ジャスミン」の存在している世界は、それらよりも上位に位置する高次元世界である。

簡単に言うと、3次元世界は、自由に2次元世界に対して干渉できるが、2次元世界は3次元世界の2次元部分しか認識できないため、干渉されていること、そして、それに伴う変化を認識することさえできない。

例えば、紙に書かれた平面世界においては、上位に位置する3次元のところから、描かれた人物像を消しゴムで消した場合、それは目の前から消え去ってしまい最初から誰もいなかったことと、同一の状態として認識される。

2次元からは3次元のものが接している部分しか、認識できないため、平面を離れた3次元のものに干渉することはできないし、認識さえできない。

その3次元世界の上位に位置するところから、現在、人間が存在する3次元世界に干渉することができるシステムが「ジャスミン」なのだ。

「S」が間接的に歴史に干渉する手法をとるのに対し、「ジャスミン」は、直接的手法によるのである。
しかし、ジャスミンは、「S」の忘れ物を探し出し、その欠点を補完するためのシステムなのだ。

第十一章 「S」の支配

表の世界からは、その存在さえ気づかれない。

「S」

「S」は、静かにシステムの再構築をしていった。

過去と現在そしてきたるべき未来、それらに間接的にはあるが干渉する事で、事実上、直結しデータを集め、どの時点のデータにでもアクセスでき、改定するためのシステムの構築を完成した。

暗号化されたデータへのアクセスに必要な素数さえ、「S」は見つけ出していた。

ないはずの公式さえ「S」のシステムは、支配し始めていた。

「S」の目的は、理想の人間社会の実現である。

すでに人類は金銭や経済による支配から解放された。

支配欲や差別意識といったものはまだ残されていた。

それらによる犯罪は、対処療法によつては、解決できないと言う事を「S」は、人類の歴史から学んでいた。

個体差が差別意識を生み、支配欲を掻き立てるのではないかという仮定に至ったのである。

生命の発祥以来、個体差のない生物など存在しない。

「S」は、そこに手を付けようと準備を始めた。

園山博士の不安は的中してしまった。

人類は、ひとりしか存在を許されないことになりかねないのだ。

しかし、それを非人道的であるなどという、そんな人道的・感傷的な概念は、「S」には存在しない。

第十二章 香の探し物

園山博士は、時間軸の特異点を探していた。

ジャスマミンの香り漂う部屋で、「J」システムは、その特異点を見つけるため現在過去未来とすべてのデータのスキャンを続けている。

宙に浮かぶメッセージは。おびただしい数のデータを表していた。

その空中に浮かぶメッセージに変化が現れた。

するとジャスマミンは、音声でこう告げた。

「香、見つけた。特異点を固定可能、固定しますか？」

園山博士はつぶやいた。

「ジャスマミン、固定と分析を頼む」

すると細かい分析が目の前に映像となつて表れ始めた。

そこには、香の予想もしなかったものが、特異点として、姿を現したのだ。

そこには、自分と同じくらいの年齢の少女の姿がホログラムで映し出されたのだ。

いやむしろ、自分そのものと、言えるくらいに共通の人間が、映し出されたのだ。

違いは、少年と少女という違いだけと言ってよく、双子ともいえる存在であった。

正確には、存在する時間が全く違う。

彼女は、21世紀初めに生まれてそこで生きている。

そして、香は、23世紀に生きているのだ。

ジャスマンが見つつけ出した特異点は、この少女そのものの存在と博士の生物上の時間の同期した箇所を指示していた。

「これは一体どういうことだ。ジャスマン」

彼は、ジャスマンにそう聞き返していた。

ジャスマンは、

「あなたと彼女は、同一の存在です。あなた方二人の存在は、すべてこの一連のシステムの稼働と関連付けられて存在しています。

あなたは、この時空の特異点として定められた、あなた自身ともいえる彼女と共に、行動することをその存在の理由として挙げることができます。」

「これよりあなたを特異点まで移動させます。」

と答えて、あらかじめ決まっていたことのように、非常に強力なエネルギーによる時間軸の移動を博士に対して行った。

彼の身体は、徐々に空間に溶け込むように、その場所から消え去った。

ジャスマンは、その空間上のディスプレイでこう呟いた。

「「香」と「香」遭遇に成功。」

「これより時空通信の開始。」

「園山香以外の命令及び、干渉の遮断・自己完結型システム起動・第一級防御体制へ移行。」

第十三章 二人の園山 香

21世紀初旬の日本

ごくありふれた公立の高校、小高い丘の上の見晴らしのいい場所にその高校はある。もちろん男女共学である。

この時期としては、珍しい転校生がやってきた。

園山香（そのやま かおる）という名前の男子だ。

朝の授業の始まる前、彼は紹介された。

このクラスの担任が、今日の最初の授業の担当でもある。

教室の中は、いつものように活気にあふれている。

言い換えれば、少し騒がしい、まあ標準的なクラスの風景の中、教壇に立った担任が

「みんな静かに、今日は転校生を紹介する。」

そう言ったら、少しだけ静かになった。

もったいぶったような口ぶりで

「先に言っとくが、びっくりするなよ」

「何言ってるの。先生」

女子生徒の声が飛ぶ。

「さあ、入って」

そう言って、担任は、教室に彼を招き入れた。

中性的な顔立ちの美少年が、教室の中に入ってきた途端に、世界がひっくり返りそうなくらいにクラス全員が驚いた。

それどころか悲鳴を上げた者や、椅子から転げ落ちたものまでいた。

「紹介いただきました。園山香（そのやまかおり）です」

と言って、在校生に背を向け、黒板に「園山香」という名前を書いて振り返った。

するとその真正面に、目をまん丸く見開いて唾然とした表情で、もう一人の「園山香」が立っていた。まるで、時間が驚いて立ち止まったかのように、シーンとした空気が流れ、しばらく沈黙が続いた。

正確には、もともとクラスにいたのは、名前の漢字は同じだが「園山香（そのやまかおり）」という読み方の違う女子生徒だ。

まるで、鏡が真ん中にある、自分を鏡に映しているだけのように見える。

いや、まるでどちらかが、鏡の世界にいるように思えた。

身長もほぼ同じ、体格もほぼ同じ、彼女は女性としてはボーイッシュであり、彼は男性としては、かなり中性的なのだ。

つまり、制服以外は、ほぼ同じ人間が二人向かい合って立っているというわけだ。

周りの生徒にとって、それは、魔法か何かでクラスごと異空間にでも移動したかのような光景に見えた。

「どうだびつくりしただろう。ぼくも彼を見た時は、園山が何で転校生なんだと思い担がれているのかと思ったよ」

もともと浮いた存在の担任は、立ち尽くす彼らをそっちのけで、自分がいかに驚いたかの話を始めた。「かおり！双子だったの？」

と教室の中から誰かが訪ねた。いや叫んだ。

「彼らは、全くの他人なんだ。すごいだろ」

と、担任は転校生そっちのけで、クラスのみんなど盛り上がっている。

「あー」

「どうした」

「僕は、どこの席に座ればよいのでしょうか」

と、カオルが訪ねた。

「おーそうだった。すまんすまん」

「園山の隣にでも座ってくれ。そこが開いているから」

カオルがポカーンとしていると、

「そうか君も園山だったか、ややこしいなあ。悪いけど、これからは君の事はカオル君、香のことは、かおりさんと呼ばせてくれ」

「それでは、あらためて、香（カオル）君は、香（かおり）さんの隣の空いている席に座ってくれ」といって、授業は始まった。いや、授業を聞いているものなどいる訳なかった。

教師の側から見ると、まったく同じ顔が、並んで座ってこちらを見ているのだ。

板書を終え、振り向くたびに、その光景に出くわす、しかも昨日までは、その場所にその顔は、一つだけだったのに、同じ顔が、二つ並んでこちらを向いているのだから、振り向くたびにギョツとするのが本音だ。

そのしぐさを見て、クラスの生徒たちは、おかしくて仕方がない。

科目が変わると、教師も変わる。そうすると、同じ光景が繰り返されるのである。

当然、その日は、学校中授業どころではなく、その話題で持ちきりとなってしまった。

その日の授業は、なんとか無事終わりに帰宅することとなった。

カオルには、ジャスミンから連絡が入り、帰宅の手順や帰宅先などすべて、カオルの記憶の中にインプットされている。

住居や食料・この時代に合わせた経済的な準備などすべて、ジャスミンが、この時代のネットワークに入り込んで、手配済みだ。いや、書き換え済みだ。

何せジャスミンが見つけた特異点が、この時代のカオルの分身ともいえる、かおりだったから、ほぼ住所も同じ生活環境も同じという事になった。

ただし、カオルの方は、生まれた時から両親とは会ったこともないし、そのことについてのデータも見ることがない。自動保育装置の中で育ったから、人工知能を備えた、人型保育アンドロイドが親代わりだったともいえる。

彼は生まれながらにして、並外れた知能に恵まれ、何かに突き動かされるように「S」の開発をなしとげ、「J」ことジャスミンの開発をし、現在、このことに及んでいるのだ。

帰宅途中、ずっとかおりと帰宅の方向が一緒だった。

カオルにしてみれば当然なのだが、かおりにとっては偶然にしか思えなかった。

歩いて電車の駅に行くまでは、同じ方向であつてもなにも不思議ではない。

電車を降りるときに、少し驚いたが、同じ駅で今日転校してきたばかりのクラスメイトが下りたので、急に親しみを感じ話しかけた。

同じ容姿なのだから、親しみを持たないわけではないのだが・・・

「香君、降りる駅同じだったんですね。」

「香さん、これからいろいろと、ご迷惑おかけすると思いますのでよろしく」

と、今時の高校生同士の男女の会話とは思えぬ会話から始まった。

それから、他愛のないクラスの話をしながら帰った。

駅から自宅まで、10分程度の道のり、普通だったら仲の良い高校生の男女のほほえましい光景のはずだが、ボーイッシュな女の子と中性的で利発そうな男の子しかも、見た目の違いが、制服だけのよ
うなカプトルが歩いている光景は、すれ違う人たちの関心を惹かぬはずはない。

まあたいていの反応は、「えっ」と言ったきり目を見開く、二人以上で歩いている人たちの反応は
「うそー」と顔を合わせて、もう一度二人の方を見るといった反応になる。

「みんな私たちを見て、びっくりしてますけど、どうしてでしょう？」

「本当にそうですね」

「私は、カオル君が、教室に入ってきた時、まるでもう一人の自分が遅刻して入ってきたみたいな感
じがして、慌てちゃったけど。」

「僕の方は、職員室で担任から、教室に君とそっくりなのがいるからびっくりするなよって、言われ
ていたから、びっくりはしなかったけど、やっぱり不思議な感じがしました。」

「なんだか、転校してきて、不安だったけど、もう一人自分がいるようで、少し心強い感じがしまし
た。」

「変なんだけど、私も、おんなじことを感じた。」

「何だか色々共通するものがありそうですね。」

「ところで、カオル君のご両親は、どんな方なの？前の学校のともだちは？」
と聞かれて、カオルは困ってしまった。

まさか、自分の生まれた時代では、両親は、アンドロイドで、友達どころか同じ年齢の子供も世界中では稀ですなんて、言うわけにもいかない。

でも、正直に答えられる日が早く来るといいなあと考えながら、ジャスミンの用意した答えを言った。「両親ともアメリカを中心に仕事でヨーロッパを飛び回っているので、めったに会えないんだ。」

「友達はいないよ。中学は、住んでいる場所があまりに不便だったので、インターネットを使った授業で賄っていたからね。」

「だから日本に来るのが、楽しみだったんだ」

そう伝えて、カオルは、やはり心苦しかった。

一番近い存在に、まだ、うそを言わなければならなかったから・・・

かおりが帰宅中に一番驚いたのは、自宅に着いた時だ、カオルの帰宅先は、かおりの家の隣だった。

「ここ・・・香君の家だったの？」

彼女の記憶のどこを探しても、隣の家の記憶がないのである。

「えーっと、ここに家なかったような、あったような・・・隣なのに何で覚えていないのかなあ」といって黙ってしまった。

隣だから見ているはずなのに、曖昧なのである。

するとカオルが

「ずっと前から家はあったんだけど、家が建つてすぐに父さんの会社の転勤で、一家で海外に行ったから、一度も住んだことないんだ。」

「今でも、両親は、日本にはいないから、この家には、自分だけしか住まないんだけどね」

「高校は、日本で学びたいからと、両親に頼んで一人で帰国したんだ。」

と、ここも、ジャスミンが用意したシナリオの通りに説明した。

かおりも聞いているうちになんだか、そこにその家があったような気がして

「そうだったの、じゃあ一人で食事は寂しいよ。夕食、私んちに来ない？私の両親に会わせるね、きつと驚くから」

「絶対ね」

と勝手に決めてきつさと彼女の家のドアを開けた。

「ママー ただいま。あのね〜」

遠くからそんな声が聞こえた。

カオルは、味わったことのないはずの不思議な感触を覚えていた。

何か懐かしいような・・・暖かいような・・・。

第十四章 香（かおり）の生い立ち

香（かおり）が生まれたのは、西暦2000年

それまで、香の両親は、子宝に恵まれず不妊治療を受けていた。

1999年の年も押し迫った12月後半から21世紀幕開けまでの1か月、かおりの母親は、最先端技術を集めた研究施設、治療のため入院をしていた。

2000年問題の最中だったので、何かあったらどうするのかという声もあったが、今回は妊娠するといった何か確信めいたものがあつたので、どうしても早く治療を受けたかったそうさ。

ただ、その最中に数回停電、それもごく短いものが数回あつて、周りはその都度ヒヤツとしたという話を聞いた。

後で聞いた話だが、検査の間、精神安定剤のせいでウトウトとしていた時に、気のせいかな、ジャスミンの花の香りがしたような気がしたそうさ。

結局それが、彼女の名前の由来なのだが……。

小学校入学前くらいの時に独り言で

「カオル」と何回も言うので、

「あなたの名前は、香と書いて かおり と読むのよ」

と何回も教えたのだが「カオルとかおり」と言って、うれしそうにしている時期があったそう。不思議なことに、そんな時は、かすかにジャスミンの香りがした。

小学校から中学校と進むにつれて、彼女は、活発で中性的な女性、女生徒からラブレターを貰うような、そんな女の子となっていた。

本人は、いつか来るであろう白馬の王子様をほんの少し期待していたのだが、周りには、そんな乙女心には気づかず正反対に見えていたようだ。

高校に入る頃には、身長も175cmになり、女の子としてはかなり背の高い部類に入っていた。

もともと知能指数も高く、運動神経も優れていたが、気取らずサッパリとした性格のおかげで、男女を問わず友人が多かった。

相変わらず、ボーイッシュな女の子だったので、特に女生徒には抜群の人気があった。カオルと出会う事となったのは、その頃である。

第十五章 暖かな家庭

カオルの家の中

「ジャスミン、かおりに夕食を誘われたけど、かおりの家族とも接触しても構わないだろうか？」

「かまわない。香にはない家族というものを十分味わってくるといい。そのことも君を知る重要なことになる。」

「僕を知ることになる？」

「それはどういうことだ。ジャスミン正確に把握したい。教えてくれ。」

「説明するより、彼女の家族に会って感じるものが重要だ。」

「そしてそれは、ほんのひと時かもしれない貴重な時間だ。楽しんでおいで」

ジャスミンは、そう答えて、カオルを夕食へ送り出した。

彼女の家に着いたといっても隣の家だから、20歩くらいの距離しかない。

ピンポン

インターフォンを鳴らした。

彼のいた時代のものとはかなり違ったもので、人工知能が対応することはなく、「ハイ」という声と共に、普段着に着替えた、かおりが玄関に現れた。

家の中からは、今までに嗅いだことのない香りがした。

それは、まだこの時代には、残っていた家族のだんらんともいえる夕餉支度の香りだった。

「どうぞ、中に入って」

「ママ。香君が来たよ」

奥から、母親らしき人が現れた。

「まあ、あなたが、カオル君」

と、一瞬戸惑ったが、溺愛する娘と全く同じ顔と背格好の男の子である。

すぐに、離れて暮らしていた我が子が、久しぶりに我が家に帰ってきたような反応に変わった。

続いて、父親が現れたが、今度は、父親も母親と全く同じ反応をした。

何故か、カオルの両親の情報は、彼らには前もって与えられていたようで、

「君のご両親からは、丁寧な電話をいただいているから、何も遠慮せずともいいんだよ」と言われた。おそらく、ジャスマミンが、そのように前もって仕組んでくれたのだろう。

「パパ。ずるい、知ってたの？隣にカオル君が引越してくるって」

・・・かおりは、家では両親に対して甘えた感じなんだ。・・・

そういった少しうらやましいという、初めての感情をカオルは感じていた。

「いやー、それにしても、名前も漢字だけだと見分けがつかないとは思ってたが、まさか姿までそっくりだとはね、さすがにびっくりだよ。」

「偶然とは、思えないわね。」

と、母親まで言つて、

「ここまで似てると、一卵性双生児だね。」
と盛り上がっている。

「なんだか、家族が増えたみたいで、うれしい」

夕食も進んで、話も弾んで、カオルとかおりの様子は、ずっと前から双子の兄妹として育ってきたみたいに見える。双子の兄弟・姉妹どちらにも見える。

体の部分、男と女という違いを除いて、恐ろしいくらいに似ていた。

手や足をはじめ、顔をお互い近づけて、まじまじと見ても、自分を見てるみたいで変な感じがした。食事が終わって、二人は、かおりの部屋にいた。

二人きりになつても、顔がくつきそうになるほど、近づいて見合っている。

遠目に見ればキスでもしてるんじゃないか、と見えてしまうが、当人たちは、自分を鏡に映して見ていると、いった感じしかない。

双子どころではない、クローンである。

「僕たち、クローンなのかなあ」

二人同時に言つた。かおりも自分の事を時折、僕という癖がある。

「そんな訳ないか。」

「男と女の違いがあるからね」

と言つたものの、心まで重なっているような気がした。

・・・僕がこの時代の存在じゃないから・・・

「今、カオル、僕はこの時代の存在じゃないって言った？」

「えっ」

・・・あなたはどこから来たの？・・・

「今、かおり、あなたはどこから来たの？って言った？」

この時、二人は、自分たちが、特別な関係にあることを、一瞬にして理解した。

どちらからともなく、体を引き寄せ、抱き合って、お互いの時空を超えた無事確かめ合った。男と女としてではなく、体の半分が残りの半分の半分を確かめるといった様子だ。

「かおり、やはり、君にはすべてを話そう。自分自身の事だけど、自分だけでは説明が付かない。明日帰宅したら、今度は僕の家で説明をするよ。」

「今は、ここまで、今日は誘ってくれてありがとう。かおりさんのお父さん、お母さん、ご馳走様。おやすみなさい」

そう言って、香の両親にも挨拶をして帰った。

かおりが門のとこまで送ってきた。

「また明日ね カオルって ジャスミンの香りがする。」

そう、かおりが言った。

家に戻ると、

「カオル君って、いい子ね。あなたと洋服取り換えたら見分けつかないかもねえ」

などといって、しばらくは両親二人で興奮し話し込んでいた。カオリは、部屋に戻り、カオルと自分にある不思議な共通点や、互いの意思が重なって認識出来ることなどを思い出し、

「一体、僕とカオルの関係って何なんだろう？」

「なぜ体をくつつけると、知識や気持ちの共有が出来るんだろう？」

「そして何より、僕たちはこんなに見かけをしているんだろう？」
と窓から見えるカオルの家の窓を見ながら、つぶやいていた。

そして、これからの自らの運命を予感していた。

「何か重要なことが、これから起きる。」

第十六章 香と香

次の日の朝、二人は、同時に家を出た。当然のように通学も一緒だ。

朝からのモデルのような15歳の男女が、二人そろって通学するのだから、だれもが注目する。

しかし、本人たちは、そんな事より、自分たちに起きている事の変化の方が、関心の度合いが大きく、ずっと話し合っている確かめ合っている。

超能力者みたいな感じがするが、そんなものではなく共有とか共振とか、まさに一心同体といった言葉の方が、あっている気がしていた。

学校での授業は、もともと、彼女もトップクラスの頭脳だし、カオルは世界を変える程の発明をした頭脳を持っている。

それが二人で並列処理している（昨日以来、徐々に頭脳が共有化している）わけだから、とんでもない授業風景になった。

学校の先生たちは、あつけにとられているといった状態だ。

しかも、男にしか解らないとか、女にしか解らないと、などありえないから、まさに天才を超えていた。

授業中に、教師の方が彼らに教えを乞うている場面の方が多かった。

特に数学や物理の教師に至っては、自分の方が生徒の席について、二人が教壇に立って授業が進み、たった一日で、その学年で習うはずの過程が終わってしまう事態になってしまった。

これら一連のことが、自分たちが出会ったことの意味に通じていて、何かしらの行動をするべき役割を担っていると感じていた。

授業が、終わって、二人で電車の駅に向う途中で、かおりが、話しかけてきた。

「カオル、あなたがここに現れた訳、考えてみたんだけどどう考えが、まとまらないの」

「かおり、僕も同じように感じてる。今日、家に帰ったら説明するけど、何をするためにここに来たのか、何を見つけるために、ここに来たのか？そのこと自体を見つけるために、来たのか？分らないんだ。」

そう言っているうちに、突然、電気屋の店頭に並んでいるテレビから流れるニュース画面が目に入ってきた。

その画面では、目を疑うような速報の字幕スーパーと共に、深刻なニュースが流れはじめた。

「臨時ニュースをお知らせいたします。本日、突然、某国が日本に対し宣戦布告しました。なお、これは演習や訓練ではありません。」

「詳しくは、まだ、わかっておりません。」

アナウンサーは、青ざめた表情で何度も繰り返し返している。

周囲は、そのことが信じられないといった表情で立ちすくむ人がほとんどだった。

人々は、不安な表情で、泣き叫んでいる女性がいたり、

「こんなのドッキリカメラだよ」

と言って、大声を出している若者もいた。

二人は、顔を見合わせ行動を始めた。

「かおり」

「カオル」

二人が発した声はこれだけ、既に二人は、自らの役割を理解し始めているようで、カオルは、すぐに自分の家の部屋に戻らなくてはいけないと走り出し、かおりも、彼に全面的に協力しなければいけないと理解し、カオルの家に向かって全力で走りだした。

すると、二人の周りに、ジャスミンの花の香りが漂ってきた。

そう思った次の瞬間に彼ら二人は、カオルの部屋に移動していた。

某国は、すでにミサイルを日本に向け数発発射していた。

直ちに、航空自衛隊の迎撃ミサイルは、応戦し最初の第一波は、迎撃に成功した。

ところが、そのすきに乗じて同盟関係にあると思われる国も、宣戦布告したのだ。

同盟国だったその国は、いつの間にか準備していた核の廃棄物を満載した爆撃機を数十機

我が国に向け離陸させようとしていた。

離陸前に壊滅させなければ、上空での迎撃は意味をなさなくなってしまう。

まさかの事態に混乱した我が国は、急遽、海上自衛隊の潜水艦に、公式には持っていない武器である核弾頭を搭載した敵地攻撃用ミサイルの発射準備を命じたのだ。

自国が生き残るために、禁断の武器を使用するか、それとも、甘んじて滅びの選択をするのか。日本の指導者は「平和国家日本」この言葉を胸に抱き、この国最後の決断をしようとしていた。

いや、そこは、すでに異次元空間に作られたシステムのコントロール室となっていた。

ジャスミンは、すでに過去から未来にまでつながったネットワークにスキャンをかけていた。

「かおり、そのキーボードで、その画面を見ながら、そこに映っているネットワークの時系列の中から某国の暴走の開始点を特定してくれ。」

初めて見たシステムだったが、かおりは、すでにカオルと同期しているため、ためらいなくその操作をこなした。

「カオル、特定できたわ。そちらにデータを送る。」

「ジャスミン、「S」の干渉以前の転換点に侵入できるか。」

「もちろん」

「侵入開始・転換点及び原因点を特定しました。直ちに排除しますか？」

「了解、直ちに排除」

「排除完了。修復開始……完了まであと5秒。最終許可を求めます。」

「許可する。」

「もう一つの国の転換点を特定できるか」

そう言ったとき、ジャスミンは、

「すでにその転換点及び原因点も排除完了しました。」

「すべて終了。未修復点無し。消失点15カ所完全に消失。すべてにロックをかけました。消失点の回復の暗号化終了。解読はK&K以外不可能。すべての行程終了。」

「ふく間に合った。」

カオルは、胸を撫でおろした。

「ジャスミンありがとう」

「カオル、どういたしまして」

「かおり、テレビをつけてみてくれる」

かおりは、部屋の壁際においてある画面にリモコンを向けてスイッチを押した。

そこには、先ほどの緊張感はみじんもなく、いつものバラエティ番組が映し出されていた。まるで先ほどの一大事がなかったかのようだ。

「一体どうということ？」

カオルは、一息ついて説明を始めた。

「今やったことは、うまく説明できないかもしれないけど・・・。

ある出来事に対して、現在から、過去のすべてのネットワーク上のデータに接続し、その出来事の原因になったデータの差し替えを行った。もちろん歪が出ないように、多くの原因点に対して少しずつの書き換えをする。そのことを繰り返すことによって、原因そのものの発生を抑え込むといったことをしたんだ。」

「その事案の過去に対して、様々な点から少しずつ干渉することで、現時点から見れば、その事案そのものが、はじめから発生さえしなかったことにする。過去の視点から見れば、未来に起きたかもしれない事件を未然に防いだように見えているというわけさ。」

「なんだか解ったような、解らなかつたような気がするわ。」
とかおりは、感想を述べた。

「実は、このネットワークを支配しているシステムを作ったのは、僕なんだ。このシステムは、まだ欠陥が残っていて、それを修正する前に、人為的なミスで起動してしまったんだ。」

「そこで、ここにいる「ジャスミン」を作り・・・」

そこまで言って、あとは、かおりの身体を抱き寄せ額と額を密着し、二人の脳波を共振させ必要な知識の共有をしていった。

その間、二人は、ジャスミンの香りと白い光に包まれていた。

その様子は、男女間の愛情表現にも似ていたが、むしろ自分自身を愛することと、人を愛することが、重なったような充実感に思えた。

しばらくして、

「なぜ、今、現れたの？」とかおりが聞いた。

「実は、今から5年ほど前の2011年3月11日にも移動可能なエネルギーがあって、移動しようと思ったんだけど、そのエネルギーの供給源となる地震と津波が、世界を破壊させる引き金になることが分かったんで、それを最小限にするために、その移動をやめ、今やったような操作を200年後の未来からやったんだ」

「基本的に自然が原因で起きることや起こったことは、このシステムでは干渉できないけど、それらの事が直接原因ではないようなものは干渉し、ある程度は防げる」

「それでは、何故あの酷い原発事故は止められなかったの？」

「あの事故は、本来人類の破壊に直接つながるほどに連鎖核反応まで起こして、今頃人類の歴史は終わっていた。だから強制的にメルトダウンが起きるようにプログラムに干渉して、地下水脈まで一気に核燃料を落とし水没させたんだ。これ以上の干渉は無理だった。地震のエネルギーが大きすぎたからね。」

「原発そのものがあの時停止していればどうだったの？」

「その干渉も検討したんだけど、停止している場合は、地震の時に人間が原子炉をほったらかしにして、避難してしまうことが分かり、だれも原子炉が核分裂を起こすというシナリオに気づかず世界中が汚染されてしまった。それが原因で人類にとって最悪の結果になってしまったというシミュレーションの結果を見て、原発の事前停止になるようには、干渉しなかったというわけさ」

「人間って愚かだね」

「かおりに初めて会った日の前にも、九州地方で大きな地震があっただろう。あれで時空の特異点に移動するためのエネルギーを利用できたんだ。」

「そのエネルギーさえあれば、どの時点にでも行けるの？」

「いや、そうはいかない。特異点が必要だ。」

「特異点って、なあに？」

「自分で発明したシステムなんだけど、このシステムは時空列が4次元や5次元といった異次元を利用して構築されていくため、今の自分でさえ、はっきりと説明できないんだ。」

「ただ分っていることは、僕とかおりという存在が特異点という存在で、異次元から見ると一つの存在と認識できるそうだ。「ジャスミン」は「S」の上位に位置しているシステムだけど、今のところそこまでしか僕には認識できない。」

「そうか。カオルと僕は二人で一人というわけだ。なんだかうれいような変な感じだな。」

「それにしても「S」は、とんでもない悪というわけだ」

「いやそんなことはないよ。「S」は人間の理想世界を実現するための研究システムなんだ。」

「理想のためなら手段を選ばないといった。人間社会にある極端な部分を学習してしまっただけなんだ。」

「そうか・・・人間は欠点だらけだね・・・」と言ってかおりは、涙を見せた。

「かれ「S」は、人間社会を調べ上げて、その欠陥を修正しようとしているシステムなんだ。だから人間に失望したら、理想実現の方法は、すべての根源の排除を行おうとするだろうから、それを止めるために「ジャスミン」を構築したんだ。」

「この世界で「ジャスミン」が言うには、それが見つかるとは思わなかった。だからここに特異点があるって」そこまで説明したら、カオルは緊張から解放されたのか、気を失うように眠りについた。かおりに、もたれ掛かるようにして、すでに寝息を立てている。

「カオル、お疲れさん。そして、ジャスミンも、お疲れ様」

「かおり、カオルをよろしく」と、ジャスミンがつぶやいた。

かおりは、カオルと添い寝するような形で、その自分と瓜二つの顔をずっと見つめていた。そして、いつの間にか、眠りについていた。

第十七章 つかの間の休息

あの事件以降、しばらくの間は、これといった大きな変化はなかった。

ジャスミンとカオルとかおり以外は、そのことを認識できないから、ずっと平穏な日々が続いていたというわけだ。

しかし、よく見ると「S」の干渉によるものも見受けられる。

例えば、クレジットやポイントそして、インターネット通貨（仮想通貨）・お財布携帯などいくらでも見つかる。

これらのどれも実体のある経済だけで成り立っているものではない。

銀行口座だって、単なる数字が並んでいるだけだし、遊んでいる人の口座に付く利子や配当の数字の方が、汗水たらして働いて日銭を貰っている人の貰う金額より多いことも稀ではない。

これらの現象は、通貨をなくすという「S」の干渉のごく初期段階で、すでに未来において確認済みなので、この21世紀初頭にも、かなり「S」のシステムは侵入に成功していると言う事だ。

おそらく、某国の宣誓布告を回避した事も「S」は、データの分析にかけているだろう。

「S」も同じように回避するために干渉しようとしたと思われるから、「S」自身も並列して干渉した己のシステムの結果だと分析していると思う。

同じ香博士によるシステムだから、敵対関係とはならないはずだ。

二人の香は、連れ立って普通の高校生が、遊びに出掛けるような場所に出掛けていた。かおりがカオルを誘ったのだ。

「カオル、この時代の高校生は、自由な時間には、遊ぶんだよ」

「かおり、遊ぶなんて初めての体験だ。」
ゲームセンターに行つて、ゲームをやったが、もともと運動神経も知能も抜群な二人が、やるもんだから、人だかりができてしまった。

二人そろってやるゲームなんかは、シンクロして全く同じ動きが、再現されるもんだから、周り巻き込んで大騒ぎだった。

ものすごく仲のいい双子のように見えていただろう。

「汗をかくのがこんなに気持ちがいいなんて思わなかったよ」

「カオル、こっちで写真を撮ろうよ」

そう言つて、かおりは、カオルの腕をつかんで、写真を撮るボックスの中に強引に連れ込んだ。

「ここを見て」といつて目の前のレンズを指さした。

顔と顔を寄せて頬をびったりとつけた瞬間、シャッターが切れた。

つぎは、カオルの斜め上から顔を突き出したり、本当に様々な写真を撮つて、その出来上がりも二人で見た。

全く同じ顔が二つ様々な表情で写っている。

二人とも心から楽しんでいた。

「おなががすいたね」

「じゃあ、ファストフードのお店にでも入ろうか？」

「ファストフードか、映像資料だけで見たあの食べ物はあるのかなあ？」

「どんなたべもの？」

「小麦で作ったパンと言われるものの中に、肉や野菜が挟まっているらしいんだ」

「あはは、ハンバーガーの事だね。200年後にはこの店ないんだ。今のうちに食べとかなくっちゃ」

と言って最もポピュラーな〇〇ドナルドに入った。

店頭で、二人重なるように並んで、かおりが、注文した後、同じ注文をカオルがしたら、店員はいたずらかなにかと思つて、怒りかけたが、二人がそろって横に並んだのを見て目を丸くしていた。

二人の様子があまりにも仲が良く、つられて笑顔になっていた。

「仲がいいのね。双子でしょ。ほんとに瓜二つ」

カオルとかおりは、そろって

「僕たち双子じゃないんです。」

「これでも他人です。」

店員も周りにいた人も含めて

「・・・」

狐につままれたようにキョトンとしていた。

二人は構わず、席について向かい全く同じ動作で食事をした。

特に今は、二人が同期しているので、行動が、同じになりやすく周りの人たちは、テレビかなにかの番組と勘違いしたらようで、周りに隠しカメラか何かはないかと探している風だった。

食事が終わって、街を歩くことにした。

商店街というよりは、ビル街の中のアーケードといった通りを歩いていた。

そこに聞いたことのある音楽が流れていた。

「かおり この曲・・・」

と、言ったところで

「この曲、知ってるの？」

「僕の時代にまで、残っている数少ない曲だよ。確か曲名は、Genesis (Adam & Eve) だったと思う。僕は、この曲が、何かとても大事なことを、自分に伝えてくれているような気がして、いつも聞いていたんだ。」

「すごい。この曲、僕も、好きなんだ。まだあまり有名じゃないんだけどね。カオル 作者、知ってるかい？」

「たしか、M.Y. (日本人) としか、残っていなかった」

「そうか、この曲は、200年以上残ったんだ・・・」

その曲を聴きながら、街の向こう側に沈んでゆく夕日を、二人は並んで観ていた。
それは、これからこの二人には、訪れないかもしれない、静かなひと時を、目に焼き付けているよう
にも見えた。

第十八章 大きく変わる世界

次の日、二人はいつものように連れ立って、学校へ向かった。

「昨日は、楽しかったね。僕、男の人と二人で、あんな風に、歩いたり食事したりしたの初めてだったんだ。」

「実は、僕なんか同年代の子と食事したのさえ、初めてだったんだ。僕の場合、周りには、大人しかいなかったんだけどね」

「何で大人しかいなかったんだい。」

「もう、僕がいた時代には、子供が生まれるなんてことは、稀なことで、僕自身、親の顔も名前も知らされていないんだ。」

カオルはそう言って少し遠くを見るような目をした。

かおりは、自分が親の愛情に包まれて成長し、同世代の仲間と共に生活してきたことを、初めて心から感謝した。

「ごめんね、少し寂しい思いをさせちゃったかな」

「そんなことはないよ。君に会うことが「ジャスミン」によれば、僕自身を知ることになるって、言っていたんだ。そしてそれが貴重な時間となるともね。」

カオリが突然思い出したように、カバンの中から昨日、一緒に撮った写真を出して両手に広げた。

「今さらだけど、本当によく似てるよね。こうやって僕とかおりは、別の人間だけど、異次元から見ると一つの存在として存在しているって、ジャスミンが言っていた事が、どういう意味なのか深く知りたくなってくるね。」

「うんうん」と隣で、かおりがうなずいている。

学校について、隣り合わせのロッカーの扉を開けて、扉の方に同じ写真を一枚づつ貼り付けた。

かおりは、自分のロッカーの中の写真にだけ、マジックで「香と」という文字を書いた。

「S」の創り出す世界は、この世界からほぼ現金をなくした。

そうしているうちに、仕事と報酬という関係が崩れてきた。

報酬そのものが、仕事で得られる満足である。といった概念に変化したのである。

ここまでは順調であったが、人間のあらゆる欲望の中で厄介な支配欲が成長した。

しかし、「S」の目指す人間の理想世界とは相いれないものなので、その兆候を持った人間は、その人物の起源にまでさかのぼって排除されてしまった。

人がいなくなることで、人間の理想世界の実現が矛盾しながら正当化されたのだ。

第十九章 カオルとかおりの真実

カオルの部屋で、二人は、大きなソファアームに、もたれかかり、同じような姿勢で、「ジャスミン」の説明を聞こうとしていた。

「ジャスミン」は、淡々と説明を始めた。

かおりが、この世に生命をもって誕生した、その時、すなわち受精卵となった初期に停電が起こった。この停電、実は、「ジャスミン」が干渉して起きたものだったのだ。

「ジャスミン」は、起動してすぐにこの時に一瞬だけ歪が出来るのを察知して、この受精卵のコピーを手に入れたのだ。正確には、コピーではなく、男と女の双子になるように干渉したのだ。

ただし、実際には、この時代に生まれたのはひとりで、もう一人は、2000年間、冷凍保存されていた。

そして、2200年の同じ月同じ日にもう一人の双子の片割れが人工子宮の中で成長しだしたのである。

性の違いだけのクローン、いやそれ以上に近い存在になった。

このことが、のちに起こることに結びつく特異点となった。

未来の出来事が過去に干渉し、過去が変わる。

そうだったことは、実際には頻繁に起こっていると言う事だ。

ただし、カオルの存在なしにそのことは起こりえなかったわけだから、人智を超えた何らかの力ともいえる。

「今までに分かっていることは、これだけ」

と「ジャスミン」は。二人に告げた。

既に二人の頭脳は、そのことを予め想定していたようで、すぐに納得した。

ただ、気持ちや感情は、まだ納得していない。

彼らには、各々意識と感情がある。

それでも、これから先は、二人は、離れることのできない存在になったことは承知していた。

薄暗い部屋の中で、二人は並んで寝そべりながら天井を見ている。

「カオル」と呼びかけたら

「うん」とだけ返事があつた。

どちらからというわけではなく

「何となく、感じてはいたけど・・・」

「僕たち、兄妹なのかな？それとも恋人？夫婦？」

「一体、何に近いのかな・・・」

「昨日、街で聞いた曲の題名みたいにアダムとイヴみたいな存在なのかな」

「確かに、イヴはアダムのクローンで男女の性だけが違う存在だったからね」

「でも僕たちは、「ジャスミン」の説明では、僕のクローンがカオルだけだね」

二人は、これからの自分たちの運命を理解したのか、互いに体を引き寄せ、震えながら涙を流した。

第二十章 「S」と「J」

ここは、すでにカオルやかおりのいた次元や時代とは、違った世界にある空間に作られた部屋のような場所。

「自分が、この世に生まれてきた使命は、一体何なのだろうって、昔からよく青春の悩みの代表みたいなもんだけど、今は、それを突き止めることが、自分たちにとって重要なんだって思う」

「カオルは、僕のクローンみたいなもんだけど、僕は女性でカオルは、男性であると言う事に何か意味があるんじゃないだろうか」

「そうだね、僕はこのことを考えて研究をしていたわけじゃないけど、ずっと自分はひとりじゃないって確信していたような気がする。」

「はじめて「ジャスミン」が、時間の特異点だと、言っただけかおりを見せてくれたとき、実はやっと会えたっていう気持ちがあったんだ。」

「ありえないはずなのに、自分にとって最も大切な人だって、思ったんだ。」

「「ジャスミン」、君(きみ)は、最初からすべて知っていたんだね」

ジャスミンは、しばらく黙っていた。適当な回答を戸惑っているようだった。

しばらくして、ジャスミンは、静かに答えだした。

「実は、最初から知っていたともいえるし、知らなかったともいえる。

かおりの両親に君たちが授かるように干渉したのは、私だが、その私自身のシステムをくみ上げた生みの親は、カオル、君だから、君自身の意志ともいえる。

君は、元をただせばかおりそのものだから、かおりの意志ともいえる。

異次元世界を含んだこの世界の成り立ちは、すべてが原因ですべてが結果ともいえるわけで、我々が納得できるような答えは見つけられないだろう。」

二人の香は、聞きながらそういった運命が、自分たちの運命だと言う事をかみしめていた。

二人はすでに何を探していたのかの答えを理解していた。

23世紀に園山香博士が作り上げた「S」というシステムは、この世界そのものが求めたシステムであった。

そのシステムは、人間世界の理想を見つけるために最初から答えを用意されていたわけではなく、

「S」自体もその理想を探さなければならぬ仕組みになっていた。

「S」の探し物を見つける手助けをする相棒、いや、もう一つの「S」が「ジャスミン」だった。

この二つのシステムが同じ創作者によって作られたのは偶然ではなく、必然だったとも言える。

そして、それらの事を成立させるためには、「香と香」という、最も大事な要素が必要だった。

彼らは、自覚しているように、たがいに対する思いやりや慈愛といった人の理想世界を構成するのに最も欠かしていけないものを探し出してくるキーワードだった。

通常の世界からは、全く感知できないであろう次元から構築し直すという使命を持った存在。その世界にとっての「アダムとイヴ」知恵の果実と生命の果実を最初から持つにふさわしい存在として、何かしらの力が働いたのかもしれない。

「S」は、何時の頃からか、葦草 sumiregusa 「J」は、ジャスミン jasmine と呼ばれるようになっ

ていた。もと存在していた次元では、すでに多くの事が、構築しなおされている。

かおりもカオルも別の人物として、そこに存在している。

もちろん、ここには、二人の香もいる。

彼らは、すでに自分の使命を納得し、次元空間を飛び回っている。

第二十一章 大円団（エピローグ）・・・大切な写真・・・

香は、

いつもの通りの時刻に起きて、

いつもと同じトーストと目玉焼きとコーヒートの朝食をとり、

いつものバスに乗って、高校へ行く

そこには、いつもと変わらぬ朝の風景

高校は、小高い丘の見晴らしのいい場所にある。

坂を少し上って、校門をくぐると、

いつもの顔ぶれの友人たちが、やはり同じ時刻に校門をくぐってやってくる。

あちらこちらで「おはよう」と言ったり、

「昨日のテレビすごかったねえ」など、いつもと同じ他愛のない話題と、朝の挨拶が交わされる。

時折、初夏の涼しい風が頬を撫でて、気持ちがいい

今日は、心なしか日差しが、優しく感じられる。

この学校には、先生と警備員を除いて男性はいない。

ここは、女子高だから当然と言えば当然なのだ・・・

この学校の七不思議に、男子用のトイレがなぜか各階にある。

一度も共学になったことなどないはずなのに、それは当然のように備わっていた。

そのことを疑問に思うものもない、最初からそうなのだから……。

教室に入る前、いつものように廊下にあるロッカーを開け、教科書や資料を準備していると、見慣れているはずのロッカーの中に、貼った覚えのない一枚の写真が、扉の内側にあるのを見つけた。

……ここに貼った記憶はないんだけど……。

……でも、なぜか懐かしいようで、少しだけ胸が締め付けられるような気がした。

見覚えのないその写真には、同年代の自分に瓜二つの少年と幸せをこれ以上表しようのないほどの笑みを浮かべた自分が写っている。

その写真には、「香と」と、マジックを使って、確かに見覚えのある自分の筆跡で書いてある。

「何？この写真？」と、独り言を言って、しばらく写真に見つめ何かを思い出そうとしていた。

その時、始業のベルがなると同時に、クラスメートの

「香、何やってんの。先生来ちゃうよ。」

と、言う言葉で彼女は、現実に取り戻され、慌ててロッカーの扉を閉めクラスの中に入っていった。

ほんの少し、ジャスミンの香りがした。

そこに、二人の香が現れた。

香のロッカーの隣にある、カオルのロッカーを、まるで壁の中に押し込むようにして跡形もなく消した。

かおりは、香のロッカーを開け「香と」と書かれた写真を外し、胸のポケットにしまい、二人の痕跡を消した。

そして、ジャスミンの香りを残して消えた。

教室のドアが開いて、香が、ロッカーを開け、出し忘れた辞書を取り出した。

そのときすでに、先ほどまで、あった写真はなくなっていた。

香は若干の違和感を感じたが、少し首をひねっただけで扉は閉じられた。

隣にあったロッカーの位置には、花台がありジャスミンの花が活けてあり、花の香りが広がっていた。香は、このジャスミンの香りを嗅ぐと、なぜか懐かしく甘酸っぱい気分になる。

窓から注ぎ込む爽やかな風と柔らかな日差し、そして、そこから見える新緑の風景は、彼女の未来を明るく希望に満ちたものに感じさせてくれていた。

完

ジャスミンの花言葉

愛想の良さ・温順・柔軟・優美・しとやか・官能・無邪気・愛らしさ・あなたは私のもの

葎草の花言葉

小さな愛・小さなしあわせ・誠実

2016年5月制作6月改定

著作者

福岡康紀

制作

福岡県福岡市南区野間4丁目27の17

美工房

※この作品は著作者に著作権があります。

著作者に無断での出版・複製・改編などはご遠慮ください。法律によって罰せられます。

この作品は、すべてフィクションです。特定時人物や国家などを想定していません。